

第1章 新町のすがた

第1章 新町のすがた

1 新町の概要

(1) 位置と地勢

本町は、茨城県の西北部に位置し、南は水戸市及び笠間市に接し、東は那珂市及び常陸大宮市と那珂川で境し、北は常陸大宮市に、西は栃木県茂木町に接している。

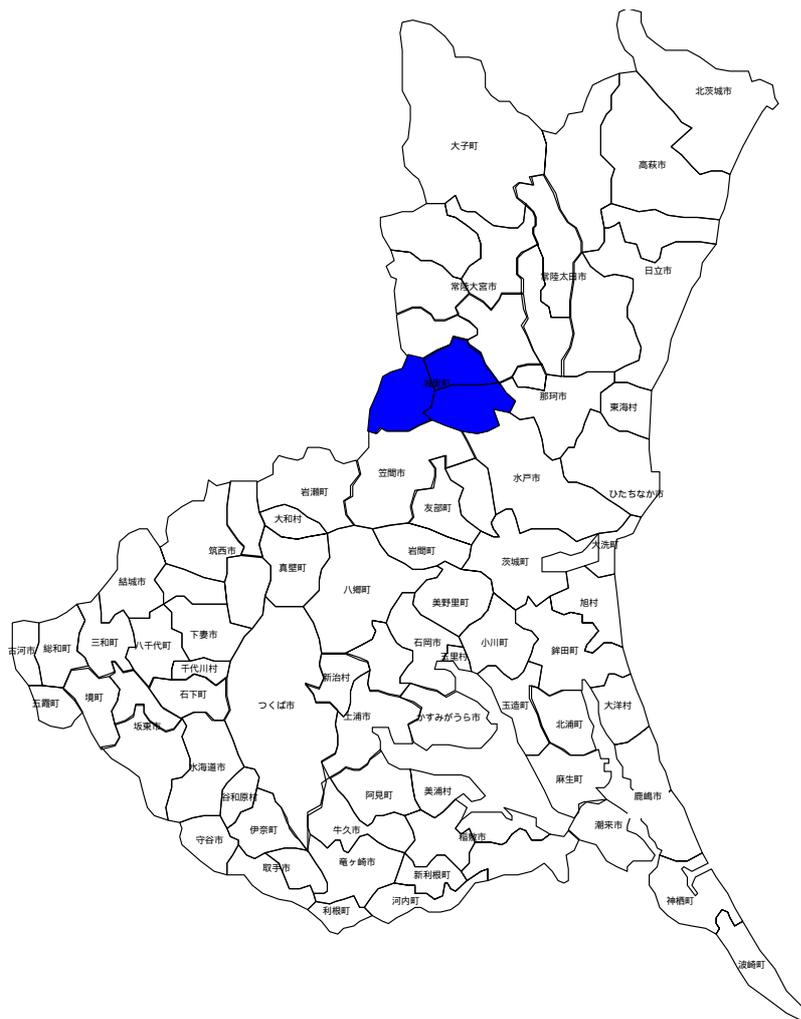
道路は旧常北町と旧桂村を南北につなぐ国道123号及び一般県道錫高野石塚線で、東西には旧桂村と旧七会村をつなぐ一般県道阿波山徳蔵線、旧七会村と旧常北町をつなぐ主要地方道水戸茂木線が整備されている。

位置は、概ね東経140度15分から140度25分、北緯36度25分から36度33分にあり、西北部には、八溝山系の標高300mから400mの山々が連なっている。

また、東部は那珂川沿岸で、標高10mから20m以下の沖積低地で農地が広がり、一大水田地帯を形成している。

河川は、那珂川をはじめ、藤井川、桂川、塩子川及び涸沼川などが流れている。

気候は、いわゆる太平洋岸気候で、夏は高温多湿でむし暑く、冬は晴れた日が続いて乾燥し、梅雨期や秋は雨が多いのが特色である。



(2) 人口と面積

平成 12 年の国勢調査によると、本町の総人口は 23,007 人で、昭和 60 年の人口 20,437 人に比べ 2,570 人の増加、1.13 倍の伸びを示している。平成 7 年からの 5 年間では 1,028 人増加しており、年平均 206 人の増加となっている。

世帯数は、平成 12 年が 6,820 世帯で、昭和 60 年の 5,385 世帯に比べ 1,435 世帯の増加、1.27 倍の伸びを示している。平成 7 年からの 5 年間では 564 世帯増加しており、年平均 113 世帯の増加となっている。

1 世帯あたりの人口では、平成 12 年は 3.37 人で、昭和 60 年の 3.80 人、平成 7 年の 3.51 人と比較すると、年々核家族化が進行していることがうかがえる。

年齢別階層人口では、平成 12 年は年少人口が 16.0%、生産年齢人口が 61.2%、老年人口が 22.8%となっており、平成 7 年当時と比較すると、年少人口の減少と老年人口の増加がうかがえる。

また、面積は旧常北町が 52.36 km²、旧桂村が 46.33 km²、旧七会村が 63.04 km²で、合計 161.73 km²となる。

2 常北町，桂村，七会村の沿革

(1) 常北町の沿革

常北町は，茨城県の北西部に位置し，昔は水戸と栃木県宇都宮市を結ぶ街道の宿場町として発展した。

古くは，紀元前1万年前から人々が住み始めたと考えられており，縄文時代になると那珂西などの台地は絶好の居住地となり，弥生時代後期には集落がではじめた。古墳時代の風隼前遺跡からは勾玉・土器などが出土している。

7世紀に律令国家が成立すると，常陸には朝廷から認められた8つの小さな国ができ，町域は那珂郡となった。当時から，町域に鹿島神社が多いのは，鹿島神宮の社殿の立替用材を那珂郡から運んだことと強く結びついていると考えられている。

中世に入ると，武士の台頭は常北町周辺にも及び，常陸大掾一門が藤井川流域と西田川流域の青山地域に進出した。鎌倉時代になると，大中臣姓那珂氏が那珂川西岸に進出し，那珂西城を居城とした。

室町時代には，佐竹氏が那珂川の水上交通を握り，大掾一族を圧迫し，西田川，藤井川流域の水田地帯を確保した。清音寺には南北朝動乱ごろ活躍した佐竹貞義・義敦父子の墓がある。

佐竹義敦から所領を相続した次郎宗義は，町域の石塚城を居城としたので，石塚氏と称された。現在の仲宿に家臣たちの町が形成され，これをもとに近世になってさらに発展するに至る。

江戸時代の慶長5年(1600年)関ヶ原の戦いは徳川家康の率いる東軍の勝利で終わり，西軍の上杉氏と通じていた佐竹氏は秋田へ転封となった。慶長14年(1609年)に家康の子・頼房が水戸城主となり，水戸藩25万石が成立。以後，町域は郡奉行によって支配されるようになる。

石塚村は街道筋にあったため，旅籠や商家が軒を並べ，賑わいを見せていた。

江戸時代の後期になると商品作物の栽培が行われるようになり，町域でも茶の栽培が盛んになり「古内茶」として知られるようになった。那珂川を利用した水運も重要度を増し，元禄期には町域に3か所の河岸が設けられた。また，庶民の文化も興隆し，私塾や寺子屋で教育も行われた。

明治維新を迎え，廃藩置県が行われ水戸藩が水戸県となり，明治8年にはほぼ現在の茨城県が確定し，明治22年(1889年)には市町村制施行により，石塚，小松，西郷の3村が成立した。また，近代教育制度が整えられ，明治6年に石塚尋常小学校が創設された。

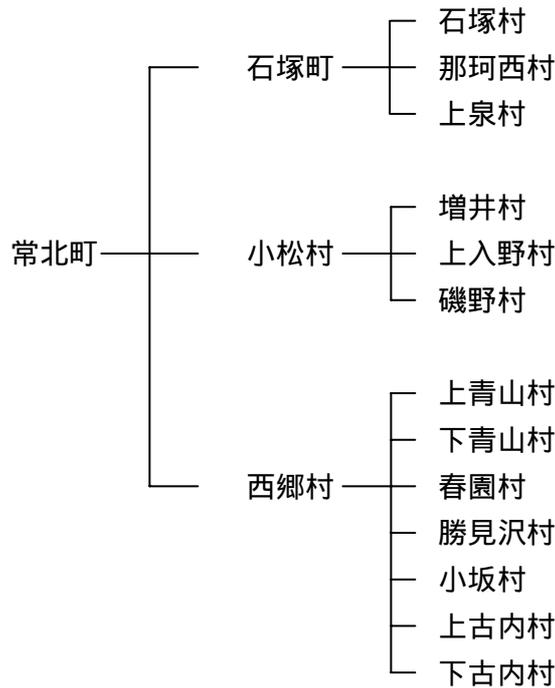
大正8年(1919年)石塚村は町制を施行し，東茨城郡北部の行政や産業の中心として発展した。また，人々の生活や産業の基盤も着々と整備され，大正12年に藤井川の水力発電所が完成。15年には茨城鉄道が水戸市赤塚から石塚間の運転を開始した。

昭和の幕開けとともに金融恐慌がおこり，産業への影響が深刻となった。やがて，世相は戦時色が強くなり，日本は太平洋戦争へ突入した。

戦後まもなく，昭和22年(1947年)に石塚の大火など混乱が続いたが，昭和30年2月11日，石塚，小松，西郷の3町村の合併により常北町が誕生した。

観光面では，公営で全国初のオートキャンプ場を備えた「藤井川ダムふれあいの里」があり，オールシーズン対応のキャビンや天体観測が楽しめる天文台などが整備され，県内外から多くのキャンプ客が訪れている。また，平成14年6月には「健康づくりの場」や「ふれあい・交流の場」の拠点施設として，温泉を活用した常北町健康増進施設「ホロルの湯」を整備し，地域内・地域間交流に努めている。

人口は、県都水戸市に隣接していること、さらには、首都圏から常磐自動車道で1時間強と恵まれた立地条件を背景に堅調な伸びを示しており、平成12年は13,459人で、平成7年からの年間伸び率は近時ほど高くなっている。



は昭和30年2月11日合併、は明治22年4月1日合併。なお、の石塚町は明治22年4月1日には石塚村で、その後、大正8年10月1日町制施行により石塚町と改称

(2) 桂村の沿革

桂村は、古くは石器時代から集落があったと考えられ、この地域一体が栄えていたことを物語る多くの遺跡や古墳が発見されている。特に、北方の東組集落や高根の台地からは、形の良く整ったものが出土している。

4世紀から6世紀頃の日本は、かなり強力な国家機構が出来あがり、地方に国・郡・村がおかれ、国造・県主・稻置・村主がそれぞれ政治をつかさどっていた。常陸地方には、新治・筑波・仲・久自・高の5国があって、国造によって治められ、桂村は仲国に属していた。仲国は、那珂川の北より霞ヶ浦に至る広大な地域であるため、応神天皇の代に、南部をさいて「茨城国造」がおかれることになった。この6国を総括して常道国といったのである。

中世以降は常陸国として佐竹氏が、忠実に足利氏のために戦い、幕府の信頼を得てこの地方の守護として実力をたくわえていったが、徳川政権が確定的になったとき、秋田に国替になった。

水戸藩の領内は徳川家の支配となり、慶安3年(1650年)には御前山のふもとを水の取水口として、阿波山の東側から館山の東側を流れ、北方の崖下から常北町上泉に至り、ここからは木樋により水戸市飯富の台地までの水路整備事業「赤沢江」を6年の歳月を費やし整備した。

また、寛永9年(1632年)には、錫高野から錫が発掘されて、本格的に精錬が始まった。それまでは「高野村」だったが、天保年間には「錫高野村」と改められた。

明治5年(1882年)には、錫高野在住の「黒沢止幾子」が専心子弟の教育に従事し、私邸を小学校に充て自ら教師となった。これは、我が国における最初の女教師である。

明治22年4月1日からは町村制によって、坏村・岩船村・沢山村が誕生した。上坏・下坏・

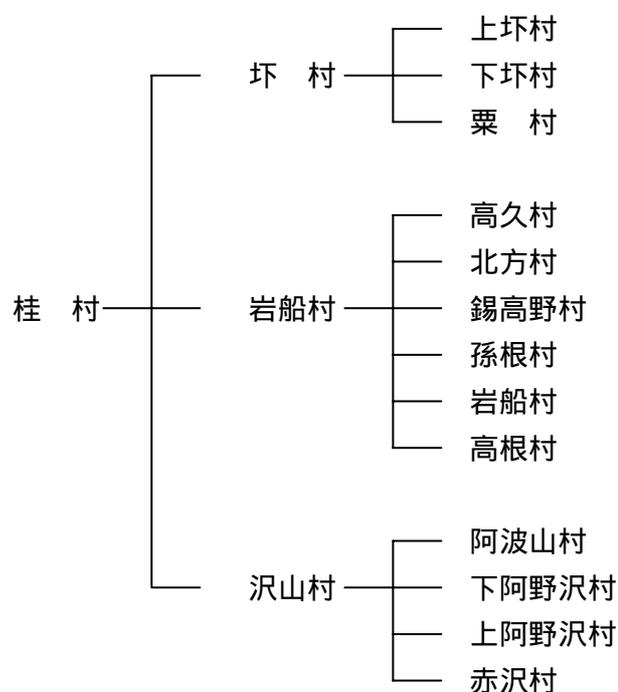
粟の3村が合併して坏村に，高久・北方・錫高野・孫根・岩船・高根の6村が合併して岩船村に，阿波山・下阿野沢・上阿野沢・赤沢の4村が合併して沢山村となった。これらの村は，昭和30年に桂村が誕生するまで，約70年間にわたり自治体としての行政を行ってきた。

合併した桂村は，役場本庁を阿波山におき，坏・岩船には支所を配し，東西17.65km，南北13.90km，面積46.33km²に及んでいる。当時の戸数は1,969戸，人口は10,496人で，新しい村づくりが発足した。

工芸品としては，岐阜県の飛騨春慶，秋田県の能代春慶とともに日本三大春慶塗に数えられる「粟野春慶塗」は，その歴史は春慶塗の中でも最古で，国無形文化財，茨城県無形文化財及び茨城県郷土工芸品に指定されている。

平成5年に「道の駅」が整備され，地元特産品の販売やモータースポーツ等の交流の場となり，地元活性化の一躍を担っている。

人口は，昭和50年以降減少が続いていたが，住環境整備政策等により平成2年頃を境に増加に転じ，平成12年では7,048人となっている。また，水戸北部中核工業団地（常陸大宮市）の整備による就業者の定住化や地場産業の振興策等により，人口増が見込まれている。



は昭和30年2月11日合併， は明治22年4月1日合併

(3) 七会村の沿革

七会村は、古くは縄文時代前から居住していたと考えられ、村内には先土器・縄文時代の埴遺跡(塩子)をはじめ、北の根遺跡・仲郷遺跡(小勝)などがある。

中世に入ると、北部の塩子・小勝付近は那珂西郡に属し、南部の赤沢は東郡(笠間郡)に属し、ともに鹿島神領であった。

文禄3年(1594年)の太閤検地で七会村は茨城郡に属した。「天保郷帳」にみる村々は北から塩子・小勝・徳蔵・赤沢・大網・真端の6か村を数えた。塩子・小勝の両村は水戸藩成立とともに水戸藩領になり、ほかは笠間藩領として幕末を迎えた。なお、笠間藩領の赤沢村は「旧高簿」では上赤沢・下赤沢の2か村に分かれている。村高合計では「元禄郷帳」で2,890石余、「天保郷帳」で3,155石余となっている。

小勝の金ほり穴、塩子の採鉱穴は、佐竹氏の支配の頃、金、銀、錫を採掘した跡という。この地方の採鉱は、天正年間、明国人「詭寛」によって、隣村高野村で、錫鉱が発見されたことに端を発するといわれ、佐竹氏支配の頃、金・銀・錫の生産は拡大したという。水戸藩の支配下に入ると、錫奉行が置かれ、徳川光圀は御錫役を置いて一帯を開発した。当時、この周辺で採鉱・裂鍊された錫は年額1,000貫を超えた。

明治維新後、村内の水戸藩領・笠間藩領は明治4年7月に水戸県・笠間県となり、同年11月茨城県に所属。明治8年大区小区制の改正で第5大区2小区・7小区に属し、明治11年に西茨城郡に編入し、明治22年市制町村制施行により、塩子・小勝・徳蔵・下赤沢・上赤沢・真端・大網の7か村が合併して、「七会村」が誕生した。

昭和29年の昭和の大合併の時点でも社会的・地理的条件により合併しなかった経緯もあり、そのまま平成元年に村制施行100周年を迎えるなど、県内の村では一番古い歴史を持つ村である。

明治42年には、桂村との行政界にある高取山でタングステンの原石である重石の路頭が発見され採掘されるようになった。

大正3年(1914年)第1次世界大戦が起きると、重石の需要は急激に増え、高取鉱山は一大発展をした。大正9年(1917年)には、従業員200人に達し、七会村及び桂村地域で家族を含めると、約600人が生活することとなった。鉱山では、採鉱課・選鉱課・庶務課の3部門が置かれるとともに、「高取鉱山診療所」を設けて、常時医師1人、看護婦1人を配置するほか、厚生施設としてクラブが置かれた。また、児童の教育施設として、桂村錫高野地内に「岩船尋常小学校高取分教場」が開校されるなど、全山活気に溢れていた。

大正12年には、常北町にあった藤井川発電所から電力の供給を受けて、村内に電灯がついた。

また、昭和10年には、全村にわたって電話が開通するなど、ライフラインの整備に努めた。

昭和21年の第2次世界大戦後は、外地からの大量引揚者と食糧難を解決するため、各地で開拓農家の入植が進んだ。

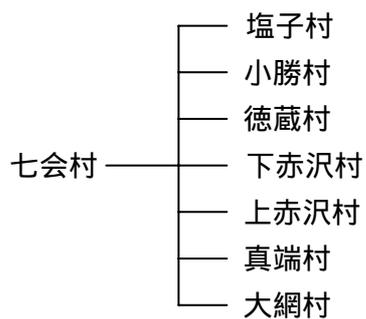
近年は、情報化推進策として、村内の公共施設を光ファイバーで結び、地域イントラネット事業を整備するとともに、村内全戸に敷設するなど、県内で最も早く基盤整備が進められた。

平成15年に物産センター「山桜」が整備され、農林業を活かした新たな都市交流事業を展開している。

人口は、昭和30年の4,286人と比べて平成12年には2,498人まで減少しているが、昭和60年の2,795人から平成12年までの人口減少数は300人程度となっており、それ以前と比較す

れば過疎化傾向にある程度歯止めがかかっている。

世帯数は、昭和 30 年から 40 年には大幅な減少傾向を示していたが、この 10 年間は各種住宅施策の成果により微減傾向に転じており、平成 12 年では 635 世帯となっている。



明治 22 年 4 月 1 日合併